

難波渦



題字 浅野鈴秀氏（日本書芸院一科審査員）

国際シンポジウム「新発見『豊臣期大坂図屏風』」

2008年11月22日（土）
会場：関西大学東京センター
（東京都千代田区）

パネリスト

フランチスカ・エームケ氏（ドイツ・ケルン大学教授）
バーバラ・カイザー氏
（オーストリア・エッゲンベルク城博物館主任学芸員）
狩野博幸氏（同志社大学教授）
イサベル・田中・ファン・ダーレン氏
（財団法人 日蘭学会）

高橋隆博（関西大学教授 / センター長）

総合司会

藪田 貫（関西大学教授 / 総括プロジェクトリーダー）

オーストリアのエッゲンベルク城博物館が所蔵する『豊臣期大坂図屏風』をめぐる、これまでに3度の国際シンポジウムが開催されてきた。2007年9月に大阪で行なわれた2度の国際シンポジウムは屏風に描かれたモチーフの現地として、また2008年8月にオーストリア・グラーツで行なわれた国際シンポジウムは屏風を現在所蔵する地としての関心から、それぞれに市民の大きな反響を得た。これらの成功に引き続き、『豊臣期大坂図屏風』の研究成果をより広く還元するため、東京でも国際シンポジウムを開催することとなった。

今回の国際シンポジウムの会場は、東京都千代田区にある関西大学東京センターである。関西大学東京センターは、東京における関西大学の拠点として開設された。東京駅から徒歩で10分程度という交通アクセスの良好な立地にある。

パネリストには、フランチスカ・エームケ氏（ドイツ・ケルン大学教授）、バーバラ・カイザー氏（オーストリア・エッゲンベルク城博物館主任学芸員）、狩野博幸氏（同志社大学教授）、イサベル・田中・ファン・ダーレン氏（財団法人 日蘭学会）の他、当センターから高橋隆博センター長が参加し、藪田貫総括プロジェクトリーダーが総合司会をつとめた。参加人数は105名であった。

シンポジウムは、前半に各パネリストによる講演、後

半にディスカッションという構成をとり、まずエームケ氏が、屏風が制作された経緯についての講演を行なった。エームケ氏は屏風に描かれる景観について解説し、その中で右端の第1扇と左端の第8扇にそれぞれ寺社が集中して配置される理由について、二つの見解を示した。

一つには、豊臣秀吉が完成した天下統一により寺社勢力を武家支配者に従属させたことを意味し、寺社に大坂城の守護者としての役割を付しているためであるとする。

二つ目の理由は、寺社が大坂城を取りまく構図によって、没後に豊国大明神として祀られることになった秀吉を称える、曼荼羅的な作画を意図したものであるとした。

カイザー氏は、エッゲンベルク城の歴史をたどりなが



エームケ氏

カイザー氏

ら、『豊臣期大坂図屏風』がグラーツの地に渡ることになった経緯について講演した。カイザー氏によると、エッゲンベルク侯初代のハンス・ウルリヒ（1568 - 1634）はハプスブルク家との所縁が深く、一代で異例の立身を遂げた人物であったという。その社会的地位を具現化するために築かれたのが、エッゲンベルク城であるとのことである。ハンス・ウルリヒの孫にあたるヨハン・ザイフェルト・フォン・エッゲンベルク（1644 - 1705）は、芸術に深い関心を寄せた人物であり、カイザー氏はこの

ザイフェルトこそが『豊臣期大坂図屏風』を購入した人物であろうとしている。その購入ルートは、アントワープの芸術商であるフォルショーという人物を通してであり、さらにその時期は1665年から1679年の間である可能性が高いと述べた。

狩野氏は、美術史の観点から『豊臣期大坂図屏風』の制作年代について講演した。本屏風について、描かれた



狩野氏

高橋センター長

景観の年代は慶長年間（1596 - 1615）であることが確認されているが、こうした風俗画においては、景観年代と制作年代とが必ずしも同じとは限らない。この点を狩野氏は、「洛中洛外図屏風」の作例を紹介しながら解説した。その上で、『豊臣期大坂図屏風』を描いた絵師と同流派の手になると考えられる作品として、「洛中洛外図屏風」のうち島根県立美術館本、林原美術館本、新潟県個人蔵本などを挙げた。さらにこれらの「洛中洛外図屏風」との比較によって『豊臣期大坂図屏風』の制作年代を17世紀半ば頃であろうと推定した。

ダーレン氏は、江戸時代の日蘭関係史の立場から『豊臣期大坂図屏風』がヨーロッパへ渡ったルートについて論じた。ダーレン氏は、屏風が17世紀後半に渡欧した



会場の関西大学東京センター

とするカイザー氏の話を受けて、時期的にオランダ東インド会社が関与していた可能性が高いと前置きしたうえで、オランダ東インド会社による日本貿易の様相について語った。その中でダーレン氏は、寛永18年（1641）

に長崎で出された輸出品目に関する禁令を紹介し、禁止された輸出品の中に風俗図屏風が含まれていることに言及し、『豊臣期大坂図屏風』が輸出された時期を推定する大きなキーポイントになるのではないかとした。

シンポジウムの後半、パネルディスカッションに入るにあたって、参加者に対して当日配布された資料に基づいて『豊臣期大坂図屏風』に描かれた大坂の景観についての案内が内田吉哉(当センター特別任用研究員)によって行われた。

ディスカッションでは高橋センター長がコーディネーターとなり、『豊臣期大坂図屏風』の制作年代、さらに制作当初の本屏風の様相をめぐる議論がなされた。これ



ダーレン氏

藪田総括プロジェクトリーダー

までも本屏風については、かつて一対をなすもう一対が存在したのではとの意見が出されていたが、ダーレン氏はオランダ東インド会社の資料では屏風について一対を表わす「ペア」との表記がみられることから、『豊臣期大坂図屏風』に失われたもう一対があった可能性を示唆した。対してエームケ氏は、『豊臣期大坂図屏風』を「城図屏風」として見るならば画題はこれで完結しているとも考えられるとの意見を示した。狩野氏は、ダーレン氏が提示した寛永18年（1641）の禁令をふまえ、本屏風は17世紀中頃に「もはや滅んでしまった、古い大坂」を描いたものではないかとの見解を示した。

最後にカイザー氏は、本屏風は日本では八曲一対の「屏風」として関心を呼んでいるが、一方オーストリアでは8枚のパネルとして分割され、エッゲンベルク城「日本の間」の壁画となっている現在の状態を前提に、18世紀に東洋趣味が流行したことを示す文化遺産として重要視されており、日本とオーストリアの協同による『豊臣期大坂図屏風』への取り組みが今後不可欠であろうと述べた。

(特別任用研究員 内田吉哉)

2008年10月30日(木)～11月1日(土)

2008年度の文化遺産視察は、10月30日～11月1日の日程で東北地方(宮城県・山形県)を訪れた。10月に開催した文化遺産学フォーラム「水がむすぶ文化遺産」で最上川を取り上げたこともあり、山形県内を南から北へと流れる最上川流域の景観と文化遺産について視察するのが今回の目的であった。

初日、午前中に仙台空港に到着した我々はバスに乗り込み、東北道・山形道を通して山形県最上郡へ向かった。古口の乗船場から草薙までおよそ1時間かけ、最上川を下った。最上川は遠目で見たときには高低差もなくゆったりと流れているように感じたが、実際に船で下っていると流れは速く、波が大きくうねっており、急流であると言われていることを体感できた。川の岸壁には幾つもの小さな滝があり、川に流れ込んでいた。



滔々と流れる最上川

その後、最上川の河口の町、酒田市へ向かった。岩手県で2番目の規模の都市である酒田市は、西回り航路による貿易で栄えた古い町である。日本最大の地主だったという本間家の旧邸宅や、明治26年に建設された米倉倉庫・山居倉庫を見学した。

二日目は、まず芭蕉が尾花沢を訪れた際に宿泊したと言われる寺、養泉寺を訪れた。

次に、二箇所で最上川を川岸から視察した。一箇所目は江戸時代に船役所が設置されていた大石田河岸である。現在は特殊堤修景事業によって塀蔵風の壁画が描かれている。近くの大石田町立歴史民俗資料館では、斎藤茂吉が大石田疎開中に住んだ「聴禽書屋」が保存されており、建物内も見学させていた。二箇所目は、最上川三難所のひとつと言われる隼である。1日目とは別の船下りの終着点になっており、川岸まで降りて、悠々

と流れゆく川を目の前で見ることが出来た。

尾花沢市の紅花資料館は地域の富豪、堀米四郎兵衛の屋敷跡である。別館では紅花染めの着物や、天王寺舞楽から伝わった林家舞楽の模型などが展示されていた。9月に行われる例祭で現在も林家舞楽が奉納されている谷地八幡宮では、境内に大きな石舞台があり、奉納の様子に思いを馳せた。同じく林家舞楽が奉納される慈恩寺も訪れ、本堂安置の仏像や天井にかかる絵馬などをお寺の方に丁寧に説明していただきながら視察した。特に目を引いたのは高さ26.7mもある三重塔で、木目の美しい重厚な塔であった。

三日目は山登りから始まった。円仁が創建したとされる立石寺(山寺)である。この地で芭蕉が「閑さや巖にしみ入る 蟬の声」を詠んだこともあって観光地になっており、午前中のまだ早い時間帯であったにも関わらず、多くの観光客が訪れていた。我々も雨上がりの薄曇りの中、小一時間かけて最上部の奥の院を目指した。途中の弥陀洞や納経堂といった彫刻物や建造物もさることながら、色付きはじめた山の木々や五大堂から眺めた眼下の景色は素晴らしいものであった。

昼食後、バスで再び奥羽山脈を越えて宮城県へと向かった。日本三景の1つとして知られる松島では、足の下の際間から海が見える橋を恐る恐る歩き、五大堂の建つ島へ渡った。島からは大小様々な島の浮かぶ美しい松島の様子がよく見えた。陸に戻って瑞巖寺を訪れ、復元された障壁画を視察した。

最後に仙台市に戻り、東北歴史博物館を訪れた。閉館間近であったためゆっくりとは回れなかったのが心残りである。その後仙台空港から大阪へと戻り、今回の文化遺産視察は無事終了した。

3日ともバスでの移動が多かったが、日本海から太平洋へと濃密な旅程であった。特に最上川流域を中流域から河口まで視察できたことは、淀川・大和川とはまた違った文化を垣間見ることができ、有意義であった。

(生活文化遺産研究プロジェクト R.A. 影山陽子)



立石寺からのぞむ

第5回文化遺産学フォーラム

水がむすぶ文化遺産

～最上川と淀川～

会場：関西大学第1学舎1号館千里ホール

河内厚郎氏（文化プロデューサー／夙川学院短期大学教授）

菊地和博氏（東北芸術工科大学准教授）

高橋隆博（なにわ・大阪文化遺産学研究センター長）

コーディネーター

藪田 貫（なにわ・大阪文化遺産学研究センター総括プロジェクトリーダー）

2008年10月18日（土）

「水と文化遺産」。今年度フォーラムのテーマは早々に決まっていたものの、われわれの生活にもっとも身近な水に文化遺産としてどのような切り口が考えられるのか、6月頃から担当者4名は、淀川資料館（枚方市）や水道資料館（大阪市）などに足を運び、さまざまに議論を重ねた。おぼろげながら「川」を取り上げることが見えてきた頃、文化遺産学交流会の打ち合わせのため、山形県を訪れ、最上川などの現地調査をする中で、菊地氏が最上川をめぐるさまざまな活動をされていることや最上川を通じて多くの上方文化が山形県に根づいていることを知り、構想は固まった。しかし、「水都大阪2009」に向けて活動が繰り広げられている大阪で川をどのように取り上げるべきか。淀川のことならば、『淀川ものがたり』を執筆された河内氏が適任であるとの北辻稔氏からのアドバイスを受け、早速、河内氏をお訪ねし、お引き受けいただくことができた。フォーラムのタイトルも「水がむすぶ文化遺産～最上川と淀川～」と決まり、いよいよ当日を迎えることとなった。

“最上川舟唄”が会場に流れる中、フォーラムが始まる。古代の都づくり以来、荒ぶる淀川との戦いの中で歴史が彩られていったという河内氏と、「母なる川」であ

る最上川が、紅花や青葙^{あおぞ}などを上方にもたらし、逆に上方の文物を山形にもたらしたという菊地氏の基調講演の後、休憩をはさんでパネルディスカッションへと移った。

パネルディスカッションでは、現在の最上川や淀川での取り組みが紹介され、今後、景観などの観点から河川を文化遺産としてどのように活かしていくべきかなどが、フロアからの小関博子氏（淀川資料館）や近江晴子氏（大阪天満宮文化研究所・センター研究員）の発言も得て、活発に議論された。フォーラムの参加者は81名であった。

昨年の第4回フォーラムでは、文化遺産体験として大阪府北部の能勢町に伝わる人形浄瑠璃が上演された。今回は、関西大学落語大学花の家かぼすさんによる「遊^ゆ山船^{さんぶね}」が彩りをそえた。大川の難波橋上で夕涼みをする喜六と清八が繰り広げる物語からは、往時の大川べりの賑やかさが偲ばれ、かぼすさんの表情と三味線や太鼓の生演奏が臨場感を引き立て、会場は笑いに包まれた。



花の家かぼすさんの熱演



パネルディスカッション

また、近年、各地の自治体は飲み水の水質向上のためにさまざまな取り組みをしているが、山形市と大阪市も水道水を飲料水としてペットボトルで販売している。「水がむすぶ」山形と大阪の不思議な縁を感じさせる。山形市水道部からは「やまがたの水」を、大阪市水道局からは「ほんまや」をご提供いただき、フォーラムの参加者全員にお配りした。水への取り組みが多方面でなされていることを参加者のみなさんに実感していただけたように思う。

今回のフォーラムは、五感で「文化遺産としての水」を考える機会になったのではないだろうか。

フォーラム開催にあたり、山形市生涯学習センター奥山慶子氏・山形市水道部・大阪市水道局には、趣旨にご賛同いただき多大なるご協力をいただきました。この場を借りて厚く御礼を申し上げます。

(P.D. 櫻木 潤)



当日配布した「やまがたの水」と「ほんまや」

文化遺産学交流会

—東北学となにわ・大阪文化遺産学—

会場：なにわ・大阪文化遺産学研究センター 1階 実習・展示室
菊地和博氏（東北芸術工科大学准教授）

「文化による地域づくりの取り組み」

岸本誠司氏（東北芸術工科大学東北文化研究センター専任講師）

「東文研アーカイブスの構築と活用について」

櫻木 潤（センター P.D.）

「なにわ・大阪文化遺産学研究センターと「文化遺産学」

内田吉哉（センター特別任用研究員）

「なにわ・大阪文化遺産学における地域連携」

2008年10月17日(金)



文化遺産学交流会・会場の様子



文化について熱く語る岸本・菊地両先生

2008年10月17日(金)、「文化遺産学交流会 一東北学となにわ・大阪文化遺産学—」を開催した。文化遺産学交流会は、当センター設立以来、はじめての試みであり、その目的は、地域において同様の活動を行っている研究センターとの交流をはかり、互いの取り組みを学ぶことにある。今回の交流会は、平成14年度よりオープン・リサーチ・センターとして活動をしている、東北芸術工科大学東北文化研究センターから菊地和博氏と岸本誠司氏を迎えた。

菊地氏からは、地域の伝承文化の継承と、それらをいかにして地域活性化につなげていくべきかという山形県では非常に切実な課題に、東北文化研究センターがどのような取り組みをしているのかについてご報告いただいた。

岸本氏からは、2007年2月に公開された「東北文化研究センターアーカイブス」（絵はがき約25,000点、写真約2,000枚、映像約30本、論文・書籍約1200件の資料を所収）について、その可能性が報告された。一枚の絵はがきから何を読み取ることができるのか、フィールドワークを行い現在の状況と比較することで、一つの資料が数十年を隔てた定点観測資料となることなどが指摘された。

当センターからは、内田吉哉研究員・櫻木潤研究員によって、センターの特色やこれまでの活動についての報告があり、その後フロアを含めた自由討論となった。

今回の交流会を通じて、当センターとの共通点や相違点、またそれぞれの特徴が見えてきた。ともに地域に根ざした研究活動を行っている点で両者は共通するが、一口に地域といっても、その環境や置かれている状況は異なる。そのため、各地域に応じた活動の一つ一つ積み重ねていくことの重要性をあらためて認識した。また今回、「東文研アーカイブス」を通じた資料の活用方法などについても学ぶ機会となった。

(歴史資料遺産研究プロジェクト R.A. 松永友和)

地域連携企画第4弾「平野をさぐる」

2008年10月5日(日)・26日(日)

10月5日・26日の二日間、地域連携企画第4弾「平野をさぐる」を開催した。まず5日に関連企画「大阪を探検しよう!」と題して、関西大学の留学生とともに大阪市平野区のフィールドワークをおこなった。留学生には、平野の町を歩きながら、印象に残った風景をカメラで撮影してもらった。参加者は54名であった。26日には、杭全神社を会場として3名の講師に平野の歴史や文化について語っていただいた。また、5日のフィールドワークで留学生が撮影した写真をパネルで展示し、あわせて写真コンテストと表彰式をおこなった。参加者は59名だった。

10月5日(日)

関連企画「大阪を探検しよう!」

会場：全興寺(大阪市平野区平野本町)

雨の降りしきる中、37名の留学生を連れてバスで平野に向かった。留学生にはA班からF班に分かれてもらい、それぞれの班にセンターのPD・RAと学生ボランティアがついて行動した。平野に到着し、全興寺を本部として午前と午後の二回に分けて散策した。各班でコースの違いはあるものの、おおむね寺院や神社をルートに入れている班が多かったように思う。特に杭全神社では各班ともに多くの時間を割いており、留学生たちは絵馬や狛犬などに興味津々の様子で、熱心に写真を撮っていた。



日本のおもちゃ作りに挑戦!

フィールドワーク終了後、留学生には自分で撮った写真の中からコンテストに応募する写真を選定し、レポートを書いてもらった。慣れない日本語に苦労しながらも、一生懸命に取り組む姿が印象的だった。

10月26日(日)

地域連携企画第4弾「平野をさぐる」

会場：杭全神社(大阪市平野区平野宮町)

講師：藤江正謹氏(杭全神社宮司)

鶴崎裕雄氏(帝塚山学院大学名誉教授/センター研究員)

北川 央氏(大阪城天守閣研究副主幹/センター研究員)

第1部では、「杭全神社と平野のはなし」と題した鼎談を開催した。鶴崎氏の進行で、藤江氏から法衆連歌会復興や杭全神社のお祭りについてお話をいただいた。そして、北川氏からは杭全神社における熊野信仰や戦国時代の平野について語っていただいた。最後に高校時代を平野で過ごされた北川氏の思い出話に話題が移ると、会場は大きな盛り上がりを見せた。



写真左より藤江氏、鶴崎氏、北川氏

第2部では、「留学生の見た平野」と題して、9名の留学生たちにフィールドワークでの感想を日本語で話してもらった。ただどしい日本語ながら、私たち日本人とは異なる新鮮な感動がありのままの言葉で表現されていた。



留学生のスピーチ

平野という土地を媒介にして、日本と外国との交流がなされる良い機会となった。

(学芸遺産研究プロジェクト R.A. 中尾和昇)

第4回「豊臣期大坂図屏風」研究会

会場：大阪城天守閣会議室（大阪市中央区）

黒田一充（関西大学教授 / センター研究員）

高橋隆博（関西大学教授 / センター長）

藪田 貫（関西大学教授 / 総括プロジェクトリーダー）

辰巳大輔氏（株式会社 文化財保存）

2008年10月23日（木）

2008年10月23日、大阪城天守閣会議室において、第4回『豊臣期大坂図屏風』研究会が開催された。今回の研究会では、『豊臣期大坂図屏風』の下張文書をテーマとして、株式会社文化財保存の辰巳大輔氏を講師として招いた。あわせて、2008年8月にオーストリアで行なわれた国際シンポジウムおよび屏風の調査に関する報告を行なった。

最初に、黒田一充（当センター研究員）から、国際シンポジウムおよび屏風の現地調査に関する報告が行なわれた。オーストリアでの国際シンポジウムおよび調査については『難波瀉』No.10に掲載したとおりである。本報告では現地での写真をふんだんに使用しながら、より詳細な解説がなされた。

次に、高橋隆博（当センター長）が、日本文化における屏風の変遷と役割について講演した。これは、オーストリアでの国際シンポジウムで、『豊臣期大坂図屏風』の当初の屏風の形態と、日本における屏風の文化史的意義を解説するために行なわれた講演と同内容のものである。『豊臣期大坂図屏風』を「屏風というモノ」としてとらえた今回の研究会にあたり、屏風に関する基本的な知識を共有するためにあらためて解説していただいた。

藪田貫（当センター総括プロジェクトリーダー）からは、今回の研究会のテーマに関連するものとして、ポルトガルの都市エボラの図書館に所蔵される屏風の下張文書に関する報告がなされた。「エボラ屏風」は、1902年に東京大学史料編纂所の村上直次郎氏によって発見された。発見当初からすでに屏風の形をとどめておらず、村上氏によれば「昔は金屏風であつたろうが、紫絹に桐の模様を出した縁が残り、下張りや骨まで露出したものであった」という。藪田は、自らも2008年にポルトガルでエボラ屏風の調査を行なった際の写真を紹介しながら、『豊臣期大坂図屏風』についても屏風の制作年代を考える上で、こうした下張文書などの遺物が判断材料となり得る可能性を示唆した。

今回の研究会に先立ち、辰巳氏にはオーストリアより借用した『豊臣期大坂図屏風』下張文書の調査を依頼していた。その調査報告として辰巳氏が述べたところによ



辰巳大輔氏

ると、第一に『豊臣期大坂図屏風』の下張にはそれほど上質な紙が用いられているわけではなく、また下張類から制作年代を特定できそうなものは発見できなかったとのことであった。下張類の状況として、使用された紙が^{にかわ}膠のような接着剤で硬化していること、中には麻もしくは木綿と思われる布が張られていたことを説明し、さらにそれらの布は屏風の骨組みの格子ごとのサイズに裁断されており、日本では見られない手法であることから、ヨーロッパに渡った後に修復を受けているのではないかとの見解を述べた。また辰巳氏が調査した結果、屏風の骨組みに文字が記されている部分があり、『豊臣期大坂図屏風』の制作年代を推定する上で、下張文書そのものよりむしろ確実に制作当初の形態を留めていると考えら



特別展の様子

れる屏風の骨組みに手がかりを求めることができるのではないかとした。

※なお、当日は研究会にあたり、大阪城天守閣で開催されていた特別展「徳川大坂城—西国支配の拠点—」を視察させていただき、宮本裕次氏（大阪城天守閣主任学芸員）より懇切な解説をしていただきました。また、北川央氏（大阪城天守閣研究副主幹 / 当センター研究員）のご厚意により、研究会会場として大阪城天守閣の会議室を提供していただきました。この場を借りて厚くお礼申し上げます。（特別任用研究員 内田吉哉）

冬野菜の収穫

今年度もセンターの農園において、吹田慈姑と天王寺蕪を収穫することができました。そのときの様子をお知らせいたします。



吹田慈姑（2008年12月10日収穫）



天王寺蕪（2009年1月28日収穫）

新刊紹介

NOCHS Occasional Paper No.7

「企画展 なにわ・大阪の文化力
～大阪文化遺産学の源流と系譜を辿る～」

第4回文化遺産学フォーラム関連展示とパネルディスカッション「回想・津田秀夫と歴史学」を収録。

(A 4版・横書き・カラー図版2p+73p、
2008年11月10日)



国際シンポジウム報告書

「人びとの暮らしと文化遺産
—中国・韓国・日本の対話—」
講演録は日本語のみ。
中国・韓国・日本の報告
レジュメ集を掲載。

(A 4版・横書き・64p、
2008年11月30日)



編集後記

『難波潟』No.11をお届けいたします。大きな行事が続き、盛りだくさんの内容をお届けしました。それとともにセンターの小さな実験農園で育てている冬野菜の収穫もお伝えいたしました。来年度は、このセンターにとって集大成の年となります。私たちが今回収穫した冬野菜のように、実り多い一年を迎えられるよう、頑張っていこうと思っています。どうぞよろしくお願いたします。

(R.A. 和住香織)

文部科学省私立大学学術研究高度化推進事業
オープン・リサーチ・センター整備事業（平成17年度～21年度）
なにわ・大阪文化遺産の総合人文的研究

関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センター News Letter 「なにわがた 難波潟No.11」

発行日 2009年2月28日
発行所 関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センター
発行者 高橋隆博
〒564-8680 大阪府吹田市山手町3-3-35
TEL 06(6368)0095 Fax06(6368)0092
<http://www.kansai-u.ac.jp/Museum/naniwa/home.htm>
E-mail naniwa@jm.kansai-u.ac.jp
印刷所・編集協力 (株) 廣済堂